

2005年1月25日

大網白里町郷土史研究会・史跡見学会に参加して

みどりが丘 3-21-26 阿部哲夫

1. はじめに

1月23日(日)に開催された表題の史跡見学会に夫婦で参加しました。

見学会の準備をして下さった方々の入念なご準備のお陰で、また当日説明役を担当して下さいました方々の素晴らしい、分かりやすい説明のお陰で、大変に充実した一日を過ごすことが出来ました。一々お名前を挙げることは出来ませんが、この見学会の実現にご努力下さった皆様に、心からお礼を申し上げます。

2. 見学先:

見学したのは、訪れた順番に、(a)季美の森のむぎわら公園とさくら公園、(b)それに酒井氏墓所、(c)長柄のふるさと村、長柄ダム、交流センター、(d)それと長柄町高山の大田実元日本海軍中将の生家、(e)そして最後に長南町の浄徳寺、長南町郷土資料館、称念寺でした。

(a)むぎわら公園とさくら公園:

まず、季美の森のむぎわら公園とさくら公園を訪れました。

我々の住む大網白里町の中に、旧石器時代、縄文時代の遺跡があることに改めて感動しました。今我々の住んでいる辺りを、教科書でしか知らない旧石器時代の人々とか縄文時代の人々が動き回っていた、生活していた、と言うのは何とも我々の想像力をかき立ててくれます。彼等は何を着て、何を食べていたのでしょうか。またどの様にしてコミュニケーションを行っていたのでしょうか。どの様な言葉を使っていたのでしょうか。

(b)酒井家墓所:

次いで戦国末期に土気城主だった酒井家の墓所を訪ねました。

初代城主だった酒井定隆こそが、彼の帰依した僧・日泰上人に、領内の寺院全てを法華宗に改宗させることを約束し、それを実行したのです。これ以降酒井領の寺院は全て日蓮宗になったのです。世に云う“七里法華”の誕生です。

ついでながらここで野生の椎茸を摘むことが出来ました。帰宅後火にあぶって食

べました。なかなか美味でした。郊外に住むことの余録だと思いました。

(c)ふるさと村・長柄ダム・交流センター:

酒井の殿様達の墓所を後にして、長柄のふるさと村に行きました。

ここは、日本には珍しくスケールの大きなスポーツ・レクリエーション施設で、中には室内プール・ジム等の各種スポーツ施設とか、ホテル・コテージタイプの宿泊施設などが完備しています。またかつてスイス大使館だった建物がここに移設され、なかなかの日本料理を提供しているとのことでした。

我々は、ふるさと村の近くにある交流センターで各自持参の昼食をとりました。

食後は、近くの農産物即売場で買い物をしたり、長柄ダムを眺望したりして、のんびりした一時を過ごしました。

(d)旧日本海軍大田実中将の生家:

その後長柄町高山にある旧日本海軍大田実中将の生家を訪ねました。

これは我々夫婦にとっては、全く予想外の感激のご対面と云うべきものでした。

私共は沖縄が好きで、年に一度くらいは沖縄に行っています。沖縄旅行を始めた頃、戦績巡りをしました。

その結果、多くの民間人が戦争の犠牲になったという話が事実なのを知りました。年端もいかない女学生が、看護婦として戦争の最前線にかり出された話し。中学生が伝令として銃弾の飛び交う戦場を往復させられた話し。混乱した軍の指令に民間人達が、いたずらに戦場をさまよわされた話し。兵隊達が自分達の身を守るために、民間人を防空壕から弾丸の飛び交う戦場に追い出した話し。防空壕に隠れている子供が泣くと敵に見つかるからと殺させた兵隊の話。等々。国民を守るべき日本軍にはあるまじき話を数多く聞かされました。

そうした中で大田中将の話を聞かされたのでした。心が震えるほどの感動を味わいました。日本軍の中にも真の“もののふ”と言うべき武人がいたのだ、と言う感動でした。

大田中将は、玉砕直前に海軍次官宛に打電した電報で、こうした沖縄県民の献身・犠牲について触れ、最後に、“沖縄県民かく戦えり。県民に対し後世特別のご高配を賜わらんことを”と打ったのです。

狭い地下壕で自決する前に、通信の難くなった状況の中にもかかわらず、こうした沖縄の人々について、本当に配慮の行き届いた電報を打電した司令官がいたの

です。

ソ連が日ソ不可侵条約にもかかわらず、ソ満国境を越えて満州に進行してきたときに、民間人を捨てて真っ先に逃げた日本軍(関東軍)を現実に見てきた小生には、彼の行ったことは、言葉で言い表すことの出来ないほどの感激でした。

その上今回の見学旅行で配布された資料によると、大田中将の夫人かつさんは、戦後顕彰碑を建てることになったときにも、“軍人である大田が戦争で死ぬのは当然だが、沖縄でも長柄町でも沢山の民間人が亡くなった。大田だけをたたえるのは、故人が最も反対することだろう”と云っていたそうです。

また大田中将の遺骨が戦後発見され、自宅に戻ったときにも、“部下がみんな沖縄に眠っているのに、司令官だけ本土に帰るわけには行かない”として、沖縄の司令部跡に埋葬したとのことでした。

戦後自分さえよければよいと言う風潮が蔓延しています。また上に立つ人間は、その地位を利用して、一般の人々の享受できない役得を貪る向きが多いように思われます。

大田中将本人に止まらず、ご遺族の方々も筋を通された生き方には、一層感銘を受けました。

我々の住む地域の近隣にこうした人物が生まれ、成長されたと云うことに感激するのです。そしてこれこそが、郷土史研究会に参加することの大きな意義の一つだと思ふのです。

(e)浄徳寺・長南町郷土資料館・称念寺:

大田中将の生家を訪ねた後は、千葉県に統合される前の機関が一部置かれていた浄徳寺跡を訪ね、更に長南町郷土資料館を見学、最後に称念寺を訪れました。称念寺では“波の伊八”で有名な武志伊八良信由が、本堂の欄間に彫った傑作“龍三態”に直面しました。

3. まとめ:

今回のバス旅行は、全体で6時間の充実した行程でした。

歩行計を付けておられた参加者の話では、一万二~三千の歩行だったそうです。

バスでの移動が主だったので、あまり歩いた感じはなかったのですが、それぞれの訪問先であまり歩いた感じもなしに歩いたのが、積もりつもってそうした距離になったのでしょう。

我々の住む郷土の歴史に触れ、高齢者達にとっては、最適の運動でもあったわけです。心身共に充実した一日でした。

改めて、今回のバス旅行を可能に下さった方々に、心からお礼を申し上げたいと思います。

以上